

年	詩	評論・伝記	紀行・隨筆	その他	できごと
1931(昭6)					生まれる。満州事変。
1937(昭12)					三島南尋常小学校入学。
1941(昭16)					太平洋戦争勃発。
1943(昭18)					沼津中学校入学。
1945(昭20)					敗戦。
1946(昭21)					「鬼の詞」第一号(創刊準備号)発刊。
1947(昭22)					旧制一高入学。日本国憲法施行。
1950(昭25)					東大国文科進学。朝鮮戦争勃発。
1951(昭26)					
1952(昭27)	詩「海と果実」発表	評論「エリユアール」発表			メーデー事件。
1953(昭28)					読売新聞社入社。
1954(昭29)	戦後詩人全集(第一巻)				「権」参加。第五福竜丸事件。
1955(昭30)		現代詩試論			芸術論執筆開始。
1956(昭31)	記憶と現在				塚本邦雄と論争。シユルレアリスム研究会。
1957(昭32)	権詩劇作品集	詩人の設計図			相澤かね子(深瀬サキ)と結婚。
1958(昭33)					長男・玲誕生。
1959(昭34)		芸術マイナス1			キューバ革命。
1960(昭35)	大岡信詩集(全詩集)*1	抒情の批判			「艶」参加。草月アートセンター活発。
1961(昭36)					安保闘争。
1962(昭37)	わが詩と真実				伊達得夫急逝。
1963(昭38)		芸術と伝統			キューバ危機。
1964(昭39)					長女・亜紀誕生。読売新聞社退職。パリ・青年ビエンナーレ参加。
					ラジオ作品執筆開始。東京五輪。
1965(昭40)		眼ことば・ヨーロッパ(美術書)			明治大学勤務。ベトナム戦争。
1966(昭41)		文明のなかの詩と芸術			文化大革命。
1967(昭42)		現代芸術の言葉			
1968(昭43)	大岡信詩集(総合論集)*2	現代詩人論(倉川選書13)	彩耳記(文学的断章)1	大岡信詩集(現代詩文庫)	東大紛争。アポロ11号月面着陸。
1969(昭44)		現代詩人論(倉川選書13) 蕩児の家系(現代の批評書2) 肉眼の思想			明治大学教授。大阪万博。三島由紀夫死。
1970(昭45)	彼女の薫る肉体	紀實之(日本詩人選7)			
1971(昭46)		言葉の出現			沖繩復帰。
1972(昭47)	透視図法+夏のための砂の嘴・まわる液体 螺旋都市(進本加筆版) あたしの	躍動する抽象(現代の美術と現代美術に生きる伝統 たちばなの夢(私の古典読選)	狩月記(文学的断章)2		オイルショック。
1973(昭48)		装飾と非装飾			
1974(昭49)	遊星の帰還りの下で	今日も旅ゆく・若山牧水紀行 岡倉天心(朝日評選4)	星客集(文学的断章)3 風の花嫁たち 青々委明ゆ 年魚集(文学的断章)4	詩の誕生(倉川共著)	
1976(昭51)	悲歌と祝福			大岡信著作集・刊行開始	ロッキード事件。
1977(昭52)	大岡信詩集(総合詩集・増補版)	現代文学・地平と内景 昭和詩史 詩への架橋(若菜新書) 明治+正・昭和の詩人たち		批評の生理(倉川共著) 大岡信詩集(現代詩文庫)	
1978(昭53)	春少女に	うたげと孤心	逢花抄(文学的断章)5 片雲の風 ことばの力	鬼と姫君物語 お伽草子 折々のうた・刊行開始	「折々のうた」連載開始。志水楠男急逝。 イラン・イラク戦争。
1979(昭54)	権・連詩(共著)				父・大岡博逝去。
1980(昭55)		詩の日本語	宇滴集(文学的断章)6		
1981(昭56)	水府 みえないまち 歌仙(共著)	現代の詩人たち 若山牧水 流れる魂の歌 萩原朔太郎(近代日本詩人選10)			

1982(昭57)		現世に謳う夢	詩の思想		
1983(昭58)		加納光於論	人麻呂の灰		
1984(昭59)		短歌・俳句の発見 表現における近代	マフソナの巨眼		
1985(昭60)	54	草府にて 詩とはなにか	水都紀行	詩と世界の間で(谷川共香)	雑誌「へるめす」創刊。
1986(昭61)	55		うたのある風景		チェルノブイリ原発事故。
1987(昭62)	56	ぬはたまの夜、天の掃 除器せまつくへめ			明治大学退官。
1988(昭63)	57	ブアンゼー連詩(共著)	人生の黄金時間		ハブル景気。
1989(平1)	58	故郷の水へのメッセージ フッザーネン通りの縄 ばじり(共著)	永訣へのごやくに候		東京藝術大学教授。
1990(平2)	59	誕生祭			日本ペンクラブ会長。フランス芸術文化 勲章シュヴリエ受章。 昭和天皇崩御。天安門事件。 東西ドイツ統一。
1991(平3)	60				湾岸戦争。ハブル景気終焉。ソ連崩壊。
1992(平4)	61	地上菜園の午後			母・大岡綾子逝去。
1993(平5)	62				コレージュ・ド・フランスで講義。
1994(平6)	63	火の遺言	「忙即門」を生せる		阪神・淡路大震災。地下鉄サリン事件。
1995(平7)	64	オハラ 火の遺言	光のくたもの 人生の果樹園にて	新折々のうた・刊行開始 大岡信詩集・続(現代詩文 庫)	マケドニア詩祭で金冠賞受賞。
1996(平8)	65				香浦出版。
1997(平9)	66	光のよび	みぢ草 ごぼが映す人生		
1998(平10)	67		しおり草	大岡信詩集・続(現代詩文庫)	「ふるさとで語る折々のうた」第一回。
1999(平11)	68		拝啓 漱石先生	大岡信詩集・続(現代詩文庫)	「しずおか連詩の五」第一回。
2000(平12)	69		おもひ草	日本の古典詩歌・刊行開始	
2001(平13)	70	世紀の変わり目「こやち み」など			アメリカ同時多発テロ。
2002(平14)	71	旅みやげ にじみかじ	日本語つむぎ	大岡信全詩集	大岡信フォーラム開講。
2003(平15)	72				文化勲章受賞。
2004(平16)	73		瑞穂の国うた	大岡信詩集(自選)	「しずおか」で、メール勲章オフィシエ受章。
2005(平17)	74				
2006(平18)	75		生の記録(未完の美術)		
2007(平19)	76				
2008(平20)	77	鯨の全話体			「大岡信」は「開」開館。
2009(平21)	78				
2010(平22)	79				
2011(平23)	80				東日本大震災。

※1 「今日の詩人双書 7」として書肆トワイカから刊行された。『記憶と現在』とそれ以降の詩が収録されている。

※2 思潮社刊。既刊詩集『記憶と現在』大岡信詩集(一九六〇)、『わが詩と真実』の再録および「水の生理」「献呈詩集」「物語の人々」「わが夜のいきものたち」「方舟」などの未刊詩集を収録。

1931年——1952年

□てきとく□

沼津中学入学

同人雑誌「鬼の詞」創刊

フランスの詩人エリユールに惹かれる

詩を作りはじめる

旧制第一高等学校入学・卒業

東京大学文学部国文学科入学・卒業

相澤かね子を知る

□主たる著作□

詩「夏のおもひ」

詩「海と果実」のちに「春のために」と改題)

エリユール論

夏目漱石論(大学卒業論文)

■ 1931・昭和六年——0歳

■二月

《二六日、静岡県田方郡三島町（のち三島市一三三）に、大岡博、綾子の長男として生まれる。》



幼少期

また水獺が空に傾く季節がきた

五十年以上昔の

二月半ばの朝まだき

ふとんの上へ

はじめて転がり出た愕きが

しみじみとよみがへる

真赤になつて

盥の中でわめいてゐる僕

なんとまあ ちんぼこまできちんとつけて

御国の宝がまた一人

軍国の田にお生まれなすつた

爆死もせず 号令もかけず

銃剣で人をあやめもせず

やつてこられた僥倖が

まだぶよぶよの状態で

盥の中でわめいてゐる

逆さ眼鏡でじつとその子を見てゐると

ただただ 不思議に 怖ろしい。

（詩「誕生祭」）

《大岡家は代々徳川家に仕える旗本であったが、維新後、曾祖父・直時らは駿府へ隠退する徳川慶喜に随行し、のち三島で警察署長に就任。祖父・延時は温暖清流のこの町の生活に安住せず、貿易商を志し、横浜、神戸、ついで上海に渡って客死した。》

中国上海市  
虹口区呉淞路義豊里  
地番は今では3222里。

ぼくの祖父はそこに独り住み その地で死んだ。

大岡延時。直時（直時）の長男として

明治十六年（一八八三）三月七日静岡で生まれ

昭和十年（一九三五）九月五日上海に死す。

享年五十二。妻と三男一女が静岡県三島に残った。

「上海のちいちゃん」が死んだとき、

ぼくはやうやく四歳。だがいつからか、ぼくには

ちいちゃんが帰国して、抱きあげてくれた記憶があつた。

ほんたうは、彼は二十年余り上海に住み、そのまま死んだのだ。

清貧一途、腎臓を病み若死にしたはず。でも

幼いぼくには彼は英雄。藍色の布張りの

ふくらみある感触の旅行鞆、コダックのカメラ、

中国人のばかでかい数々の名刺、お宝の遺品。

（詩「延時さんの上海」より）

《父・博は、作家を志すも断念し、教育者の道を選び、そのかたわら歌誌「菩提樹」（前身は「ふじばら」）（一九三四年創刊）を主宰した。歌人としては戦前の雑誌「セルバン」に戦争批判の歌を投稿、掲載されるなど活動をしている。「菩提樹」によって多くの弟子を育て、のちに静岡県歌人協会初代会長に就任した。母・綾子は博と同じく、小学校の教師であった。》



大岡博と大岡綾子

『セルバン』一九四〇年三月号は、清水幾太郎らの「ヨーロッパ文化の批判」、室伏高信らの「現代政治の性格」、トマス・マン、ルイス・マンフォードらの「アメリカ文化の再検討」といった特集が並んでいて——主題と執筆者が凄い——、目次に小さく短歌俳句とあり、大岡博の短歌「冬日小閑」五首が掲載されている。詞書は「阿部内閣退陣の日」。